
ポケスペ！！

吉武 和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケスぺ!!

【Nコード】

N1109BA

【作者名】

吉武 和

【あらすじ】

レッドさんが主役です。

そして、ゴールドの扱いが雑いです。

あ、ほかのキャラもか…

そうならないように全力で頑張ります。

ちなみに作者は感想をもらおうと舞い上がってしまうくらいうれしいので感想もどしどし待っています！

新たな旅立ち（前書き）

ポケスペが好きすぎて書きました。

気にしてもらえるか不安ですが、どうぞお楽しみください。

新たな旅立ち

ここマサラタウンで、一人の少年が朝を迎えた。

「ふああ、よく寝た」

両手を上げだらしく欠伸をしている少年の名はレッド

第九回ポケモンリーグの優勝者であり、数々の事件を解決している経験がある。

「と、いっけね。今日はオーキド博士に呼ばれてるんだった」

レッドは簡単に朝食をとり、いつもの格好に着替えた。

「ピカア」

「お、ピカ。帽子、サンキュー」

自身の最も信頼できるピカから帽子を受け取り、ボールホルダー腰にセットしピカと共に意気揚々と家を飛び出した。

（また、戦いが始まるのか。わざわざシロガネ山から俺を呼ぶって事はだいぶ危ないことなんだろうな）

『オーキド邸』

レッド視点

「オーキド博士来たぜ」

ドン、勢いよくドアを開け昔と変わらぬ研究所に入った。

「おお、よく来たな。さ、ここに座れ」

「はい」

「コーヒーはブラックでよいかな」

「砂糖もお願いします」

オレは奥へと案内され空いているソファに座った。

「知っているかの。レッド」

コーヒーを自分の分とオレの分を入れたオーキド博士は、同じくソファに座った。

「何がですか？」

「数日前、シンオウ地方というところでな、お前たちと同じように図鑑所有者らがギンガ団という組織の野望を阻止したそうじゃ」

「あ、知ってます。俺も昨日帰った時、ニュースで見ました。オレもシロガネ山にいなかったら行っていたのに」

少し悔しそうに笑って見せる。

「シンオウ地方のワシの同僚のナナカマド博士もめずらしく興奮しottaわ」

博士は手元にあるコーヒーをズズ、と飲み干した。

ズズ、と聞いて自分と同じ紅い瞳の少年を思い出した。

「で、博士。要件はなんですか」

「ム。そうじゃな。では、世間話はここまでにして本題に入ろうか」

和やかなムードが、急に豹変する。

「実は、お前にはイッシュ地方に行ってもらおう。

「イッシュ：ですか？」

イッシュ地方：確かカントーでは、見られない珍しいポケモンが沢山いる所だって聞いたけど…

「そこには、他人のポケモン盗むプラズマ団という悪の組織を調べてほしい。すでにグリーン、ブルー、ゴールド、シルバー、クリス君たちが昨日イッシュ地方に旅だっている。ホウエン組とシンオウ組はまだ若すぎるから呼びわせなかったがの」

「もうみんな行っただんですか！？待ってくれてもいいのに」

「：レッドよ。今までで一番厳しい戦いになるじゃろ。下手したら死んでしまうかもしれない。それでも引き受けてくれるかの」

今までにないくらい真剣な表情で博士は俺に問いだした。

俺は大きく首を縦に振り言った。

「：もちろん！オレはそのために戻ってきたんですから」

「では、新しい図鑑とポケギアの進化版Cギアとイッシュ地方に行くためのイッシュパスをお前に渡そう。十二時に船に乗るのじゃ。そして、向こうに着いたらCギアでグリーン達に連絡するのじゃ」

「はい：行ってきます。行こうピカ」
「必ず帰ってくるのじゃぞ」

新しい図鑑とCギアを受け取りオレは、手を振ってそれに応じて勢いよく外に出た。

ボールからプテを出そうと手に腰を当てたときふ、と思った。

（イエローに会いに行きたい：！）

「：行くか。イエローの家に」
「ピカァ！」

プテを呼びオレはイエローが居るであろうトキワシティにプテを飛ばした。

新たな旅立ち（後書き）

あとがき

俺の小説どうでしたか？

とても短かったですよね（笑）

そんな感じなのですがそれでもよかったら2話の方もご覧になってください。

あと、イエローだけが呼ばれなかった理由は2話で明らかになります。

ハウエン組はしばらく出ません

では、感想待ってます

イエローとレッド(前書き)

さて、二話の投稿です。

早ってという人もいるでしょう。

一応、もう一話ためてるのでそれも明日投稿します。

では、どうぞ。

イエローとレッド

プテの空を飛ぶでトキワシティにやってきた俺はイエローの家の前にプテを降ろした。

（イエロー。いるかな？ 案外寝てたりして）

そんなことを思いつつもインターホンを鳴らす。

ピンポン、と音が扉越しからイエローの家に響くのが聞こえる。

……………

返事はない。

もう一度インターホン押す。

……………

変わらず返事はない。

本当にいないのか？

そう思うと何故か損失感が体を襲う。

不安が襲い、体中を駆け巡る。

「イエロー！」

ドアノブに手を掛け、扉を開ける。

レッドの目に入って来たのは…

「…………イエロー？」

テーブルに朝ごはんらしきものに交じって机にうつ伏しているポニーテールのイエローが座っていた。

寝息を立てて…

「本当に寝てた…てか、カギぐらい閉めとけよ。不用心じゃん」

「ぴかぁ！」

「ピカア！」

すると、奥の部屋からチュチュが飛び出してきた、肩にいたピカがチュチュのところに駆け寄る。

二匹は仲良く、くるくると回り奥の部屋へと消えていった。

そんな二匹を見た後、俺はしばらくイエローの寝顔を見ていた。

だらしのない寝顔だけど、俺は見惚れた。

ただただ、言葉通りにイエローの寝顔に見惚れていた。

一見くだらないように見える事が俺に幸福感を与えてくれる。

（…そろそろ時間かな？）

Cギアで確認すると11時20分。

微妙に時間があった。

「ピカ。行くぞ」

イエローを起こさないために小声で呼ぶ。

少しするとピカとチュチュが奥からやってきた。

ピカは、察したようでチュチュに自分の頬をすった。

チュチュは別れの時が来たのが分かったようで目が悲しみに満ち溢れている。

見かねた俺はチュチュの頭を撫でた。

「大丈夫だって。俺たちは絶対帰ってくるから…な！」

ゴシゴシ、とチュチュを撫でると俺はピカを自分の目線に抱き上げた。

「…ピカ。残りたいなら残っていいんだぞ？」

「…ピッピカピ」

ピカは強い決意の目と共に首を横に振った。

「そっか、分かったよ。じゃ、外へ出たら絶対に振り向くなよ？」

ピカを降ろしイエローを見た。

スゥー、スゥー、と寝息を立てていた。

「じゃあな、イエロー」

俺はそのまま扉に手を掛け家を出ようとするふ、と思い出した。

チュチュに戸締りを頼まないと

そう思い振り向く。

「そうだ、チュチュ。戸締り————」

「レッド…さん？」

目を擦りながらイエローが寝ぼけたような声で言葉を発した。

俺は、バツとイエローにを背を向け、走り出そうとした。

「待って下さい！」

抑制力のある力強い声だった。

ピタ、と足が止まる。

ダメだ。動け。動けよ…！

心でそう念じてみるも俺の足は一向に動こうとしなかった。

「どこに行くんですか…？」

「……………別に」

「久しぶりに会いましたね」

「……………そうだな」

「何か、あったんですか」

「……………何もないよ」

「嘘だ！」

ビクッと体が震えた。

「どうして嘘をつくんですか？そんなバレバレの嘘を！またどこか行っちゃうんですよね！」

「イエロー…」

「お願いです。何も言わずにサヨナラなんてしないで下さい！僕を置いていかないで…」

イエローの泣く音が聞こえる。

泣かせているのは俺だ。

悪いとは思っている。

でも、俺は振り向かないって決めたんだ。

イエローを背に俺は告げる。

「また、新しい悪が現れた。今までにないくらい大きな組織が…カントー組とジョウト組でイッシュに秘密裏に乗り込む」

「え、なら僕も！」

「ダメだ！」

自分でも珍しいと思った。

声を荒げるなんて

「他のみんなは呼ばれたけどなんでお前だけが呼ばれなかったか分かるか？」

「…僕が…弱いからですか？」

俺は首を横に振った。

「違う。俺が博士に頼んだ。イエローは呼ばないでくれって」

「え？ どうして」

「帰る場所がほしかったから…かな」

「帰る場所…？」

「そう、他のみんなは帰る場所…家族がいるけど俺にはないから。だからイエロー」

俺の帰る場所になってくれないか？

そう告げる。

「レッドさん。でも、僕は…」

「それにイエローは俺の大切な人達の中で一番の大切な人だから」

「レッドさん…！それはどう言う意味——」

「またな」

手を上げて俺は家を出た。

決して振り返らない。

その思いを胸に俺は…いや俺達はプテに乗りクチバへと目指す。

下で、イエローが何かを言ったようだがもう俺には聞こえなくなっていた。

今の俺の顔はどうなっているだろう？

顔が熱くなっていくのを俺は感じた。

イエローとレッド（後書き）

うわゝ、レッドさん。

それ軽く告白ですよ（笑）

VSサザンドラ（前書き）

この話からレッドさんがイッシュへと乗り込みに行きます。

書いてて思ったのですがブイをどうしよう？と思っております。

あと、大事なお知らせです。

この作者の都合でカントー組の年が16才、イエローが15才、ジ
ョウト組が14才

ホウエンが13才、シンオウが12才です。

そして、ブラックやホワイトは全く出てきません。

以上お知らせでした。

V S サザンドラ

『自室』

ボオオオー

汽笛が船全体に鳴り響き、デッキにいる人たちは目の前にある自分たちの目的地をより近くで見るために、デッキへと集まってくる。

「うーん。着いたか…？」

しかし、俺は思いつきり自室で寝ていた。

「ピカ。着いたのか？」

「ピカ」

ピカは、そう肯定してデッキの方へと走って行く。

睡魔に耐えながらもおぼつか無い足取りで俺もデッキへと出た。

『デッキ』

デッキに出ると気持ちのいい潮風が俺を迎えてくれた。

もうすぐでイッシュに着く。

そう思うと複雑な気分になった。

見たことのないポケモンに会えること…

もう一方で、未知なる敵と戦う不安…

「俺も不安になることってあるんだな」

ぽつり、と呟いた。

『イッシュ、イッシュです。まもなくヒウンシティでございます――』

船内全体にそう放送が入る。

俺は、傍らにいるピカに目をやり、お互いに頷いた。

「さ、いこうぜ。イッシュへ」

俺たちは、イッシュへ着いた。

「さて、着いたしグリーンに連絡するか。確か、このCギアにはライブキャスターって言う機能があったな」

船の中で読んだ説明書の通りに操作し、グリーンのライブキャスターにつないだ。

しばらく待つとライブキャスターにグリーンの顔が映った。

なぜか、ひどく疲れた様子で

「どうしたんだ？グリーン。めっちゃ疲れた顔してるぞ？」

「：レッドか、早く来い。俺だけじゃ、この面子を相手することが出来ない」

「本当にどうしたんだ？」

「：聞こえないか？」

グリーンに言われ、少し耳を澄ますと納得した。

「ゴールドたちが言い争ってる話が聞こえるな」

「ああ、ゴールドがブルーにちよっかい出してシルバーとクリスが切れた。」

：特にシルバーが」

「あいつは生粋のシスコンだもんな」

「とにかく、早く頼む。場所はチャンピオンロードだ」

そうグリーンは言って、ライブキャスターを切った。

「だそうだから、行くか。チャンピオンロードに」

自分の手持ちに言って俺は、歩き出した。

（やっぱり、旅は歩かないとな）

自然と顔の頬が緩んだ。

P M 9 時

イッシュについて既に5時間が過ぎた。

当たりはすっかり暗くなり、人影すら見れない。

道中、全く見たことのないポケモンたちに胸を熱くさせられ草むらへと飛び込んだりしてバトルを仕掛けていた。

結果、現在地は4番道路。あまり進んではない。

これじゃ、後5日ぐらいかかってしまう。

「にしても、この新しいポケモン図鑑便利だな。全国対応しているし、相手の技の威力とかポケモンのステータスまで分かるし、まるでロケット団の図鑑みたいだな」

今日であったポケモンたちを図鑑で確認しているその時だった。

後ろの草むらが揺れた。

反射的にボールを握り、後ろを振り向く。

黒い物体がが俺に襲いかかる。

「いけ！ニョロ。`こころのめ`で受け止めろ」

ボールからニョロを繰り出し、相手の攻撃を受け止める。

今、あたりは暗く俺もニョロもよく相手が見えなかった。

だから見えなかった。

相手の顔が三つあることに

「サザンドオラン！」

真ん中の首がニヨロに、かみくだく、を繰り出す。

「ニヨロ！いったん離れろ」

ニヨロは、相手を突き飛ばし、相手と距離を取った。

「大丈夫かニヨロ！」

ニヨロは、親指を立てて大丈夫と示す。

俺は、少し安心したようにため息をついた。

安心するとすぐに俺は凶鑑を開いた。

「名前はサザンドラ。タイプはあく、ドラゴン。覚えてる技はかみくだく、りゅうのはどう、こわいかお、ドラゴンダイブ」

相手のタイプはあく。

なら…！

「ニヨロ。、ばくれつパンチ、」

効果抜群のばくれつパンチがサザンドラにヒットする。

サザンドラは苦しそうに呻き、どこかへと去った。

「ふうー。不意打ちだから少し焦ったな」

額の汗を拭い俺は地べたへと座り込む。

「もう遅いし、そろそろ寝るか…」

起き上がりカバンからテントなどを張り、俺は眠りについた。

??? 視点

「お嬢様。そろそろ暗くなったし休もうよ」

「そうだぜ。明日も長く歩くんだしここらで野宿にした方がいいと思うぜ」

「…そうですね。そうしましょう」

オイラの提案を、お嬢様は承諾する。

「じゃ、おやすみなさい」

「おやすみ。お嬢様」

「おやすみ。お嬢さん」

オイラ達はそう言って、それぞれ好きな場所で眠った。

VSサザンドラ（後書き）

四話は、もうバレバレの三人組との絡みです。

さて、その三人組の二つ名を考えたいと思います。

ホウエンの二つ名も考えたのですがサファイヤだけが微妙だなーと思います。

ので、サファイヤの二つ名も募集します。

皆さんは何かいい二つ名はないですか？

できたら、皆さんに考えてほしいです。

感想と一緒にどしどし待っています。

VSDダイトス&ゴウカザル（前書き）

さて、今回レッドさんが勘違いを起こします。

本当におれはレッドさんをどうしたいんだろ？

では、お楽しみください。

VSDダイトス&ゴウカザル

レッド視点

ピピピピピ

聞き慣れた音に俺の意識は覚醒した。

いや、聞き慣れてはいるが聞くこと自体はかなり久しぶりだ。

3ヶ月ぶりかな。

凶鑑の共鳴音を聞くのは：

てことは、ここにグリーン達が来ているのか？

確か、新しいポケモン凶鑑は全ての凶鑑所有者：つまり13人の凶鑑所有者が集合して初めて鳴るシステムのはずだ。

でも、13人そろそろ事なんて不可能だ。

ルビーたちやシンオウ組を呼んでいない。

仮に揃ったとしても、新しい凶鑑を渡してはいないはずだ：

「とにかく確かめてみるか：もしかしたらまた、黒いポケモン凶鑑かもしれない」

音のする方に慎重に近づく

どうやら、この草むらの奥から鳴っているようで草むらに身を潜め覗くような形で様子を覗うことにした。

見ると後姿で顔が分からなかったが、赤い帽子を被った赤マフラーの少年と若干クロワッサンヘヤー（一瞬、エメラルドと間違えた）緑のマフラーの少年たちが顔立ちの綺麗なミニスカートの女の子を眺めていた。

「まだ寝てるな」

「寝てるね〜。よっぽど疲れていたんだろうね〜」

「かわいいな」

「かわいいよね〜」

「どうしようか？」

「こうしようよ〜」

この時の俺は、元の性格も関係してるんだけど早とちりをした。

赤マフラーの少年が無防備の少女に手を伸ばした。

（あいつらまさか…寝込みの子を襲おうとしてるのか！）

そう結論し、おれは草むらを飛び出した。

「お前ら、その子に何をしようとしている！」

「「うわあ」「」

いきなりの俺の登場で二人は面食らった。

今だ。

「行けゴン！ニヨロ！」

「パール。ニヨロ隊員とゴン隊員だよ」

「今は、そんなこと言ってる場合か！」

「？」

二人と俺の間に巨体のゴンが現れ、ゴンを影に俺はニヨロに耳打ちをする。

ニヨロは頷いた。

「ゴン。メガトン「ダイヤ！、メガトンパンチ」が来るぞ」え？」

二人は、左右に分かれて避けメガトンパンチが外れる。

でも、本命は…

「ああ、パール」

「しまった。いつの間に」

この子は助けた。

ニヨロは、彼女をおぶっておりそつと俺の後ろに置く。

それにしても、よく寝ている。

こんなに騒いでいるのに一向に目を覚まさない。

ニヨロに彼女の事は任せることにしよう。

「あいつ。ポケモンが出す技が分かるのか？」
「お嬢様を返せ！」

すると、先までのほほんとしていた少年が表情を変えてポケモンを繰り出してきた。

「いけ、るー。はっぱカッター！」

見たことのないポケモンがゴンに向かって大量のはっぱを打ち出す。
はっぱが、ゴンの腹にヒットする。

「俺も手伝う、いけ、サルヒコ！ かえんほうしゃ、」

これまた見たことのないポケモンが出てきてゴンに、かえんほうしゃ、
や、をする。

「また、見たことのないポケモン。でも…！」

懐からポケモン図鑑を取り出し二匹の能力を見る。

「ドダイトス。タイプ草、地面。ゴウカザル。タイプ炎、格闘か…」

「「ああ、それは！」」

「ん？なんだ、知ってるのか」

「なんで、アンタなんか…？」

「きつと、盗まれちゃったんだよ。取り返さない」と」

盗む？ いったい何のことだ？

「ま、いいか。いけ、プテ！」

ボールからプテを呼ぶ。

「うわあ、次はプテ隊員だよ」

「だから、そんなこと言ってる場合か！」

なんかコントみたいだな。

「プテ。いわ、いわなだれ、だ。避ける」またかよ。 gon は、ねむる、だ」

「あんたがなんでポケモン図鑑を持っているかは知らないけどお嬢さんをさらう奴なんか悪い奴に決まっている」

「さらう？何言ってるんだ！お前ら襲おうとしていただろう」

「あんたこそ何を言ってるんだ」

どうも話がかみ合わない

二匹は、いわなだれを避けて反撃に移る。

「ダイヤ。お前はプテラを、おれがカビゴンをやる」

「やらせるか。プテ！ゴウカザルにドラゴンクロ」

「るー。はっぱカッターダイヤスペシャルマッハ・ワン・アンド・オンリー」

超高速のはっぱカッター技名を言い終える前にがプテの翼に当たる。

当たり所は、大したことがなかったので助かった。

「すげえ。今の、はっぱカッター、あんな発想は無かった」

感心している場合じゃなかった。

それにしてもこいつら強い。

凶鑑所有者たちと手合せしているみたいだ。

「プテ。ゴン連れて、そらをとぶ。」

「撃ち落とせ。、かえんほうしゃ、」

「るー、はっぱカッターダイアスペシャルマッハ・ワン・アンド・オンリー、」

「ゴン。プテに当たらないようにカバーだ！」

、ねむる、から回復したゴンがはっぱと炎を受け止める。

「プテ。ゴンを落とせ！」

上空に高く舞い上がった巨体が落下していく。

「ゴン。、のしかかりだ！」

ドン！

ゴンののしかかりが二体を襲う。

「くそ。サルヒコ。、インファイト、だ」

「キキ……」

「サルヒコ？」

「オ、オイラのるーも動かないよ」

「、のしかかり、の追加効果だ。お前たちのポケモンはマヒしている」

俺は、二匹を戻し新たにポケモンを出す。

「いけ、フッシー、ピカ！」

「うわぁ、ピカ隊員とフッシー隊員だよ」

「んなこと言ってる場合か！俺達やられそうなんだぞ」

本当にこいつら悪人か…？

「お前、ポケモンの構えだけで技が分かるんだよな？」

「そうだけど…それがどうした！」

「なら、この構えは何か分かるかな？」

フッシーとピカが究極奥義の構えを取る。

「わ、分かんない」

「だろうな」

「パールでも、分かんない技なんてあるの？」

「見せてやるよ。ピカ！フッシー！ボルテッカー！ハードプラント！」

二体の技が放たれた時、当たりが爆発に包まれた。

煙が晴れ二体のポケモンが倒れていた。

「るー！」

「サルヒコ！」

二人は各々のポケモンに駆け寄る。

「大丈夫だ。手加減したからそれに二体とも効果いまひとつだろ？」

二人は、自分たちのポケモンを見て言った。

「ホントだ。ぎりぎり耐えてる」

「パール。オイラたちの負けだよ」

「なんでだ？まだ、俺達にはポケモンが…」

「ううん。あの人全然本気だしてないよ。それにオイラ見たんだ。ボルテッカーって技、電気技なのにじめんタイプのるーにダメージがあるんだ。オイラたちじゃないっこないよ。それに…」

「それに？」

「悪い人じゃなさそう」

少年はえへ、と笑った。

「君たち名前は？」

敵意のない二人に近づき名を聞いた。

「…フタバタウンのパール」

「オイラもフタバタウンのダイヤモンドだよ」

どこかで聞いたことのある名前だ。

…あ

「君たちがシンオウの図鑑所有者？」

「そうですよ」

「彼女も？」

「はい」

「さっき彼女に手を伸ばしたのは襲うわけじゃなかった？」

「起こすためですよ」

「ごめんなさい！！」

「「うわぁ」」

俺のローリング土下座に二人は引いた。

「俺、二人の事を誤解してた。まさか凶鑑所有者だなんて…」

「いえ、オイラたちも勘違いしちゃってたのでいいです」

「…ありがとう。許してくれるんだな？」

「はい。パールもいいよね？」

「…ああ」

二人の許しを得て最後にやり残したことをやることにした。

立ち上がり最後に自己紹介くらいしよう。

「あんたの名前はなんていうんだ？」

「俺の名前は、レッド。マサラタウンのレッド。『戦う者』さ」

新しい凶鑑を見せて俺はニコッ、と笑った。

VSDダイトス&ゴウカザル（後書き）

レッドさんチート（笑）

あれで本気じゃないって…本気出したらどうなるの？

てか、これ見ているとダイヤよりもパールの方が主人公に見えてきた。

あと、捕捉で究極技は普通の技とカウントしません。

つまり、ピカやフッシーたちは5つの技が使えるということです。

捕捉以上です。

引き続き二つ名と感想待ってます。

VS マメパト (前書き)

今回、バトルシーンは大したことありません。

てか、サザンドラからマメパトって…

そんな作者ですが温かい目で見てやってください。

V S マメパト

プラチナ視点

ものすごい爆風が起きてその音に私は目を覚ましました。

まず、目に入ったのが隣にニヨロボンが居ました。

「なぜ？ イツシュ地方にはニヨロボンはいないはず…あなたは誰かの手もちなのですか？」

「ニヨロ」

そのニヨロボンは、苦笑交じりであるところに指をさしました。

私の目に映ったのは、いつも通りにのほほんとしているダイヤモンドと怒ったような顔のパール。

そんな二人にクルッと一回転して土下座をする15〜16の男性が…

…何がどうなったのです？

「とりあえず私も混ざりましょう」

私は、ダイヤたちの輪の中に入るために寝袋から出て、立ち上がった。

ダイヤ視点

「俺の名前は、レッド。マサラタウンのレッド。『戦う者』さ」

そう言った瞬間オイラの視点が地面に塗り替わった。

代わりにパールの声が聞こえる。

「すみませんでした。まさか、あなたがあの大先輩のレッドさんだなんて：俺たちがした無礼な行為を許してください！」

頭に何か押さえつけられている

きつとこれはパールの手なんだね

「い、いいよ。俺も勘違いしてたから」

「痛いよパール」

「ばか。早く謝れ」

「だから、もういいって」

「あの？何をされているのですか二人共？」

「お嬢様。おはよう」

「おはようございます。ダイヤ」

「おはよう。お嬢さん。聞いてくれ。かくかくしかじか」

パールがお嬢様に今までであったことを説明している間オイラはレッド先輩の方に向いた。

「レッド先輩！手持ち見せてくれませんか」

「え？あ、どうぞ」

そう言ってオイラに手持ちを見せてくれる。

オイラは、鼻息を荒くしてレッドさんの手持ちを凝視した。

「ギャ、ギャラ隊員まで居る！！レッドさんしばらく見させてくださいね！」

「お、おう」

「やめんか！」

スッパコン！

オイラの頭にいつもの痛みが来る。

「い、痛いよ〜パール〜」

「ダイヤモンド。ダメですよ。レッド先輩が困っているではありませんか」

「え、えっと。君は？」

「申し遅れました。私、プラチナ・ベルリッツです」

ぺこり、お嬢さんは頭を下げた。

（な、ダイヤ。今、すごいことが起きてるよな？）

（うん。あのお嬢様が、下々に名乗る名などありません！って言わなかったよ〜）

「聞こえていますよ？二人共」

「「あはははは」」

あ、お嬢様から黒いオーラーが見える。

「それよりも君たちはなんでイツシュ地方に？」

「はい。実は私たちはナナカマド博士の依頼で迷いの森とネジ山にある進化の岩についてのデータを取りに来たんです」

「進化の岩？」

「はい。その近くでイーブイと言うポケモンを育てると新しい進化を起こすのです。それが気候も環境も全く違うシンオウにもあるのもデータを取って比較するのです」

「へー、君たちこの前、シンオウの事件を解決したばかりなのに……」

「いえ、この旅は旅行みたいなもんです。レッド先輩」

「そういえば、パール。お前はなんで構えだけで技が分かるんだ？」

「それはダディの影響で」

そう言ってパールはレッド先輩のことを話し出した。

それにしても、レッド先輩のポケモンがタウリナーΩの隊員たちと一緒になんてオイラ驚いたよー

「な、ダイヤモンド」

すると、レッド先輩がオイラに話しかけてきた。

「ダイヤでいいですよー」

「そうか。ダイヤ、実は頼みがあるんだ」

「なんですかー？」

「俺にあの超高速のはっぱカッターを教えてください」

「え？」

レッド先輩がオ、オイラが頭を下げているよー

「オ、オイラ。なんかじゃ教えっこないよ」

「そこを何とか頼む。どうしても今以上に強くないといけないんだ！」

「そういえば…レッド先輩はどうしてここに来たんですか？」

「え！」

パールの一言にレッド先輩はたじたじになった。

何か、聞かれたくないことを聞かれたみたいだ。

「りよ、旅行さ…ほら、イッシュは珍しいポケモンが沢山いるだろ」

「一人で、ですか？」

「い、いや、おいて行かれたけどグリーンたちもいるんだ」

「どこかで待ち合わせとかは？」

「一応、チャンピオンロードで…」

「なら、しばらく一緒に同行してもよろしいでしょうか？」

「お、お嬢さん!？」

お嬢様の突拍子もない提案にオイラ達は口をあぐりと開けたままになる。

「それで、旅をしている間にダイヤがレッド先輩をレッド先輩が私たちにバトルを教えてくださいませんか？」

「俺は、それでいいけど」

ちら、とレッド先輩がオイラの方を見る。

「ダイヤ。いや、ダイヤモンド。お前はどんなんだ」

パールがオイラの事をダイヤモンドって言う時は、真剣な時だ。

オイラは深く頷いた。

勿論、縦に

「オイラがどこまで教えられるかは分かりませんが頑張ってみます」

「マジで！？ありがとうございます！」

レッド先輩は飛び跳ねるほど喜んでくれたよ

オイラもこんなに喜んでくれるなんて嬉しいな

その時だった。

お嬢様の草むらが揺れたかと思うと急にポケモンが出てきた。

「お嬢様危ない！」

「ピカ！じゅうまんボルト！」

飛び出して来たポケモンをすかさず傍にいたピカで対処する。

「こいつは、マメパトだな」

図鑑も出さずにレッド先輩は言った。

「こいつとは何回かやっているけどここにも住んでいるんだな」

くるりとお嬢様の方を向き心配そうな口調で問う。

「大丈夫か？」

「あ、はい。ありがとうございます」

「さて、テントとか片づけてから行こうか。次の町へ」

レッドさんの一声にオイラたちはそれぞれの作業を始めた。

VS マメパト (後書き)

かなり無理やり感が出ていましたね。

それはともかく、三人と一緒に途中まで一緒に旅をすることにしました。

そして、レッドさんはダイヤに超高速で打ち出すはっぱカッターを覚える事ができるのか!?

次回は、ダイ嬢ができたらいいな

感想と二つ名の募集待ってます。

感情と意志（前書き）

かなり更新が遅れました。

すみません。

次は、2日後くらいに更新します。

感情と意志

あれから3日経った。

俺が、三人にバトルを教え、ダイヤが俺に超高速のはっぱカッターを教えていた。

今は、フキヨセシティの豪華ホテルのバトルフィールドでダイヤと一緒に特訓中だ。

それにしても、プラチナの家が買ったとかなんとか…

金持ちって怖いな。

「…次こそ！フッシー。はっぱカッター！」
「フシ！」

勢いよく一枚のはっぱが的を描いている木に勢いよく飛び出るが、はっぱのスピードはやはり肉眼で確認できるスピードだった。

「だあゝ、また、失敗だ」

「ドンマイです！レッド先輩」

「サンキュー。ダイヤ。ダイヤは3日でできるようになったんだよな？」

「実践で使ったのは4日目です」

ダイヤは、そう言って傍にいる、るーの頭を嬉しそうに撫でてやった。

るーは、嬉しそうに目を細めた。

3日間の特訓ではっぱを一枚に絞るところまではできるようになったけどスピードが出ない。

思わず軽いため息をついた。

「向いてないのかな？俺達には」

困ったように俺はフッシーに笑いかけた。

フッシーも俺と同じように困ったような顔を浮かべた。

「ほら、お嬢さん！勇気出して言って来いよ」

「で、ですが……！」

「大丈夫だって！レッドさんなら喜んでOKしてくれるよ」

「わ、分かりました。私……勇気を出して言います」

そんな話声が聞こえたと思うとポケモンセンターにきずぐすりなどを買いに行っていたパールとプラチナが帰ってきた。

「どうしたんだ？二人共」

「お嬢さんがレッド先輩に伝えておきたいことがあるんだそうです」

「うん？なんだ」

「あの、その、え、と……私、レッド先輩……？」

「ああ！」

その時だった。

いつも通りにポケモンたちとドーナッツを食べていたダイヤが遮る

ように大声を上げた。

「ど、どうしたのですか？ダイヤモ——」

「お嬢様！オイラ、頼み忘れたものがあるんだ。ちょっと、着いてきて！」

「ええ！ちよっと、ダイヤモンド！？」

ダイヤは、プラチナの言葉を聞かずに走り去ってしまった。

ほんの少し緊張した俺は、一気に力が抜ける。

なんだったんだ？今の？

「あははっはははは」

呆けていた俺の耳にパールの笑い声が入って来た。

「ど、どうしたんだ。急に笑い出して」

「あはは、い、いえ。ダイヤの奴がおかしくて、あはっはは」

目をやると、笑い焦げているパールが目に入る。

「どういうことだ？」

「いえ、あいつも、自分の感情（気持ち）に、負けたんだって」

「…同じこと言うけど、どういうことだ？」

「…レッド先輩？マジで鈍いんですね」

「どういうことだ？」

「好きなんですよ。ダイヤはお嬢さんの事が」

「…マジ？」

今思い返すとダイヤは、ずっとプラチナの事を見ていた気がする。

俺が、プラチナをさらった時もダイヤがいち早く動いていた気がする。

「でも、それならお前も好きだろ。プラチナの事」

「ええ、好きですよ。もう恋って言うんですかね」

さらって言ったよ。こいつ

「じゃ、どうして？あきらめるのか？」

「はい。俺、何かをやり遂げたいという意志に弱いんですよ」

「自分の感情（気持ち）を偽ってでもか？」

「……………ええ、俺以上にお嬢さんの事を想っていますから。あいつは」

「そっか」

なんか、悲しいな

そう軽く同乗していた矢先の事だった。

パールが、何か思いついたような笑みを浮かべ俺の顔を見た。

「レッド先輩にもいますよね？好きな人」

「な、居るわけないだろ！」

「ずるいですよ。俺だけ恥ずかしいこと言わせておいて」

「さらっていたくせによく言うよ」

「まあまあ、でも、いますよね？」

分かってるんだぞ、と言わんばかりの笑みで俺に詰め寄った。

「：好きとかは、分からないけど、大切にしたいって思える人はいる：かな？」

「名前の通りに顔が赤いですね」

はっと自分の顔に手を当てる。

熱い。

自分でもはつきりわかるくらい熱かった。

「ヒュー、レッド先輩可愛い」

「：せ」

「え？」

「先輩をおちよくるなああ！いけ、フッシー」

「え、ちよ、ペラヒコ。応戦頼む」

その晩、俺は朝になるまでパールを追いかけまわした。

プラチナ視点

「ダ、ダイヤモンド。私、つ、疲れました。止まってくれませんか？」

「……………」

私の願いを聞き入れたようで、ダイヤモンドは足を止めた。

代わりに握られている手をぎゅっと握りしめた。

「い、痛いです。ダイヤモンド」

私は、彼の名を呼ぶが彼は、返答もせず、振り返りもしなかった。

「ダイヤモンド？」

恐る恐る、私はもう一度彼の名前を呼んだ。

「どうしたの？」

「怒っています？」

「そんなことないよ」

「どうして私を連れだしたのですか？」

「分からないの？」

いつもとは違う低い声で、私に問いかけた。

私は、首を横に振った。

「どうしてオイラが、お嬢様を連れだしたか分からない？」

「：はい。わからないです」

「さっきレッド先輩に何を言おうとしたの？」

「さっきのですか？それは——」

「はいはい。その少年と少女」

私が、先ほどの事を申し上げようとした時、怪しげな軍服のような服を着た男女が私たちの間に入ってきました。

「あなた方は？」

「俺達は、プラズマ団と言うものだ」

「そのプラズマ団がオイラ達になんの用？」

「突然だけどお前たちのポケモンを解放させてもらうわ！」

そう言って私たちに向かってみたことのないポケモンを私達に繰り出してきた。

感情と意志（後書き）

さて、ダイヤがお嬢様を連れ出して何やら問い詰めよう（？）としました。

ま、べたな奴ですけどね（笑）

引き続き感想と二つ名を待っています。

ギャンブラー襲来（前書き）

今回の話でかなりストーリー展開がわかってきます。

そして、プラチナとダイヤに襲い掛かる強敵：

では、どうぞ。

ギャンブラー襲来

「見た事の無いポケモン…でも！」

私は図鑑を取り出し、その二匹のデータを閲覧した。

「ダゲキ。からてポケモン。ナゲキ。じゅうどうポケモン。二体とも格闘タイプ。ならば、行くのです。ユキメノコ！」

「ポケモン図鑑だと!？」

「まさか、私たちの存在を知って？」

「オイラ達も。いけ、リー」

「ダイヤモンド。格闘タイプにノーマルタイプでは」

「大丈夫だよ」

いつも通りにふるまっているように見えましたけど、目は違っていた。

いつもの優しい目じゃない。

怖い。

「ぼおーとしている女をやるぞ。ダゲキ、かわらわり」

「OK、ナゲキ。のしかかり」

二匹のポケモンがユキメノコに技を繰り出す。

「お嬢様！」

「大丈夫です。ユキメノコは氷・ゴースト。かくとう・ノーマル技は効きません」

「しまった」

「『知識』が足りませんね。ユキメノコ、ナゲキに、サイコキネシス」

「しまった。効果はバツグンだ」

ナゲキが戦闘不能になる。

「さあ、もう一体です」

「調子に乗るな！ しっぺがえし」

「しまった。ゴーストにバツグンのあく技を！」

「それだけじゃないぜ。後から技を出すと、しっぺがえしの威力は倍になる」

ユキメノコは戦闘不能寸前になる。

「あはは、弱いな。図鑑所有者ってのも」

「…？ あら、あの少年のベルベルトは？」

「りー。しめつける」

すると、下からダイヤモンドのリーが現れる。

「あなをほる、ね！」

「ダゲキ。振りほどけ！」

「今の内だよ。お嬢様！」

「は、はい。サイコキネシス」

サイコキネシスをまともに受け、ダゲキも戦闘不能になる

「こ、こっちにはもうポケモンがない…」

「に、逃げろー」

「あ、まっ————」

二人は、慌ててどこかへと去った。

追いかけてようとした私は、急に足に力が入らなくなった。

ふら、と体が揺れ意識が遠くなっていく。

呼吸をするのがつらい。

走りすぎて過呼吸を起こしたようです。

く、苦しい。

「お、お嬢様！」

薄れゆく意識の中ダイヤモンドの声が聞こえました。

通常視点

お嬢様が倒れた。

ゆっくりと倒れていく中、ダイヤは両手を滅一杯に伸ばし、何とかプラチナを両手に収めた。

しかし、プラチナのその表情は苦しそうでそれを見るとダイヤの表情は泣きそうな顔だった。

どうして？と自問自答する。

こうなってしまったのは

分からなかった。

今のダイヤには、分からなかった。

すると、ある音が聞こえた。

チャリーン、とコインを弾く音が寝静まった町に響き渡る。

「分からないのかい？」

声も聞こえた。

若い男の声だった。

ぱっ、と後ろを振り向く。

そこには、コインを上下に弾く男がいた。

何度も何度も男はコインを弾いていた。

「表か裏か？どっちだと思う？」

男はそうダイヤに聞いた。

「な、何を…言っているんですか？」

「いいから答えな」

「お、表」

ダイヤは、恐る恐る答えた。

ニツと男は笑いコインをはね上げた。

今までの比べ物にならないくらいに大きく弧を描きダイヤの目の前に落ちた。

「どうだい？」

「裏…」

満足そうに男は頷き、腰に手を当てた。

「俺の勝ちだ。いけ、ズルズキン」

「！」

ダイヤに向かって見たことの無いポケモンを繰り出す。

ダイヤは咄嗟にお嬢様を少し遠くの所にそっと置き図鑑を取り出し、男のポケモンのデータを見た。

「レパルダス。れいこくポケモン。あくタイプ」

「それが図鑑か…おもしろい。レパルダス、イカサマ、」
「りー！」

レパルダスの、イカサマ、がヒットする。

「あれは…！」

「イカサマ、こいつは面白い技さ。相手の攻撃力が高ければ高いほど威力が高くなるという技さ」

「りー！戻って。行け！ぷー」

「鋼タイプで来るか。ならば、ズルズキン」

「また、見たことの無いポケモン…」

「ズルズキン。とびげり」

「ぷー。てっぺき」

とびげりがぷーにヒットする。

「てっぺきで防御力を上げたか」

「ぷー。メタルバースト！！」

負ったダメージ分を強化して返す、メタルバーストが相手にヒットする。

ズルズキンは、戦闘不能に陥った。

「ほう、やるな。流石、図鑑所有者だ。だが…」

男は、表と呟いてまたコインを弾いた。

今度は己の手の平に乗せる。

「表だ。爪が甘いぜ」

ダイヤの足元が揺れた。

いや、正確にはプラチナの足元が揺れ地面を突き抜けた。

「ワル！」

ワニのようなポケモンがプラチナをかつさらいまた地面へと潜った。

「あなをほるだ。さっきお前がやった手口だ」

「お、お嬢様を返せ！ぷーーーーー」

ボタン、とぷーは倒れた。

「そいつはもうだめだ。さっきの俺のズルズキンにはシャボの実を待たせていた」

「そんな…でも、オイラのポケモンはまだ…」

「動くな。でないとこいつを」

男の足元が揺れ、ワニのポケモンが現れる。

「ワルビアルが食うぞ」

「！」

途端にダイヤの体は動かなくなった。

「それでいい。にしても、少年。いい腕だ。特別に名を名乗ってやるよ」

男は、コインを弾きこう言った。

「俺は、四天王のギーマ。そして、プラズマ団の幹部だ」

落ちていくコインを背にギーマはプラチナを連れ去った。

ギャンブラー襲来（後書き）

はい。という訳で作者の都合で四天王が敵です。

そして、さらわれたプラチナ。

どうなる？プラチナ

どうする？ダイヤ

そして、レッドさんとパールはいまだに遊んでいます。

はい。

話が変わるのですが二つ名の件についてなのですが、中々こないの
で例を挙げたいと思います。

ミッル

『信ずる者』

こんな感じです。

それにしても、ギーマのイメージがコイントスをしているのが強い
と思うのは俺だけでしょうか？

後、シャボの実の効果ってあれで合ってるのかな？

感想と二つ名を待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1109ba/>

ポケスペ！！

2012年1月15日01時45分発行